



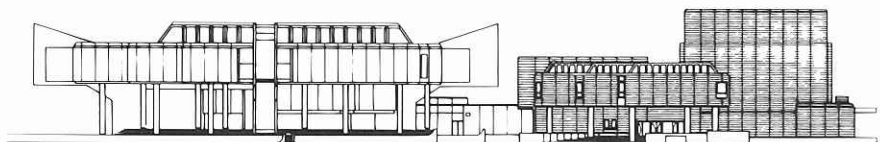
阿弥陀如来像（七山村・東木浦积迦堂）平安時代

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM・SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

20 January 1997

No. 116



企画展案内

佐賀の信仰と美術 — いのりのかたち —

会期：1月25日(土)～3月2日(日)

当館は、寺院や神社に伝存する文化財をとおして、信仰のなかにある美や歴史を再発見するため、平成4年度から4年間にわたり、県内227カ所の学術調査を実施した。多良岳や脊振山の山中からは平安時代の古仏が見いだされ、佐賀平野では豊かな田園を基盤にした中世寺院の隆盛を確認し、外海に面した松浦地方では中国や朝鮮の仏像に出会った。山、野、海、それぞれにふさわしい信仰と美術である。

今回の展覧会は、[山岳仏教]、[禅寺と律院]、[大名の信仰]、[中国・朝鮮の美術]、[唐津と博多]の五部からなり、調査の成果に既知の名品を加えて「佐賀の信仰と美術」をひろく見わたそうとするものである。ふるきよきものと、佐賀を愛し、美を愛するいまのよき人とを結びつける線となれば幸いである。

[山岳仏教]

佐賀には、黒髪山系をはさんで西に多良山系、東に脊振山系の山岳地帯があり、脊振山では天台宗、黒髪山と多良岳では真言宗の密教が盛んであった。

脊振山系の仏教遺品としては霊仙寺跡の経塚が有名であるが、あらたに七山村・東木浦釈迦堂や佐賀市・妙福寺などで平安時代にさかのぼる密教系古仏が見いだされたことは大きな収穫である。

多良山系では、真言中興の名僧興教大師覚鑑の修行の地といわれる岩屋山興法寺から平安時代の石仏が見いだされ、黒髪山関係では、定林寺の旧堂跡から出土した鎌倉時代の五帖杆が確認された。当地の山緒の確かさを物語る遺品である。

*主な出品作品 (◎国重文、◇県重文)

- 1 阿彌陀如来像 (平安時代、東木浦釈迦堂)
- 2 ◇千手観音菩薩像 (平安時代、夕日観音堂)
- 3 大日如来像 (平安時代、妙福寺)
- 4 如来像 (平安時代、興法寺)
- 5 五帖杆 (鎌倉時代、定林寺)

[禅寺と律院]

鎌倉時代後期、蒙古襲来によって北部九州は政治的な重要性を増した。これ以後、南北朝時代にかけて九州の寺社は活況を呈している。とくに隆盛を極めたのは、中世の武士に重んじられた臨済宗の禅寺と西大寺流律院であった。

佐賀では、運慶四代と目される湛康と、その系譜につらなる湛普、湛真、湛勝など“湛字仏師”と呼ばれる仏師たちの、禅寺や律院での活動が知られる。足利将軍家に重用され、臨済宗の禅寺を中心に活躍した院派仏師の作品が高城寺や萬歳寺につたえられることも注目される。

*主な出品作品

- 1 ◎釈迦如来像 (鎌倉時代、東妙寺)
- 2 十一面観音菩薩像 (湛普・湛真作 正和4年、東妙寺)
- 3 ◎普賢延命菩薩騎象像 (康俊作 正中3年、龍田寺)
- 4 ◎歳山順空像 (正安2年、高城寺)
- 5 ◇持国天像・多聞天像 (湛康作 永仁2年、円通寺)
- 6 ◇観音菩薩像 (湛勝作 暦応5年、普恩寺)
- 7 十一面観音菩薩像 (伝円慶作 永仁6年、福泉寺)
- 8 傳大士像 (室町時代、萬歳寺)

[大名の信仰]

近世の文化をになった最大の力が、大名であったことはいうまでもない。佐賀藩三代藩主鍋島綱茂が描いた仏画は描線、彩色ともに大変すくなくていて質が高い。

福泉寺の金銅仏は当地の庄屋を中心に、佐賀や有田、伊万里の町民まで百余人の合力によりつくられている。大名文化の対極にあつた庶民の信仰と文化をつたえる作品である。

*主な出品作品

- 1 地藏菩薩像 (鍋島綱茂筆 江戸時代、高伝寺)
- 2 観音菩薩像 (谷口吉三郎作 宝永5年、福泉寺)

[中国・朝鮮の美術]

長崎、対馬から佐賀、福岡、山口をとおり、瀬戸内海沿岸にかけて、中国大陸や朝鮮半島の仏教美術

作品が多くみられる。彼の地と海をつうじて交流がふかかった西日本の地理的・文化的特色としてしばしばふれられることだが、とくに佐賀においては、質的にすぐれた作品が多いことが注目される。朝鮮半島の作品では普明寺の菩薩像、鏡神社の楊柳観音像、鍋島報効会所蔵の法華経などがあげられ、仏像、仏画、経典それぞれの分野において高麗時代を代表する作品としてひろく知られている。すぐれた作品をつたえる美意識がみてとれるだろう。

＊主な出品作品

- 1◇菩薩像（高麗時代、普明寺）
- 2◎楊柳観音像（至大3年、鏡神社）
- 3◇阿弥陀八大菩薩像（高麗時代、広福護国禪寺）
- 4◇法華経（至元6年、鍋島報効会）

【唐津と博多】

文禄、慶長の役のさなか、豊臣秀吉が大坂へ帰ったことにともない、寺沢志摩守広高が代官となった。広高は中国や朝鮮との外交をつかさどっていたため、通辞として博多聖福寺の禅僧耳峯玄熊を招いている。臨済の高僧の交流の環が唐津までひろがったことが想像できるだろう。耳峯が住した近松寺と少林寺からは、頂相などゆかりの作品が出品される。

＊主な出品作品

- 1 耳峯玄熊像（自画自賛 桃山時代、近松寺）
- 2 牡丹文鎧金合子（明時代、少林寺）
- 3 蓮華文釜（桃山時代、近松寺）
- 4 達磨図（耳峯玄熊筆 桃山時代、少林寺）
（学芸員 竹下正博）



多聞天像（運康作）部分 円通寺



地藏菩薩像（鍋島綱茂筆）部分 高伝寺



楊柳観音像 鏡神社



耳峯玄熊像（自画自賛）近松寺



1. 土肥春嶽 その人

平成9年1月2日から同月19日までの間、美術館展示室において「土肥春嶽 回顧展」が開催され、多くの方に観覧いただいた。

教育者であり、現代佐賀を代表する書家である土肥春嶽の回顧展開催は多くの書家の方々が待ち望んでおられたことだと思う。今回、主催者である佐賀県書作家協会からの依頼で、美術館は資料調査および展示を担当したが、展示資料の多くが佐賀市本庄町土肥家に保管されていたものであり、今回が初展覧の資料もある。

ご存じの方も多いと思うが、土肥春嶽氏の経歴について簡単に触れておく。

土肥春嶽は明治45年、佐賀県佐賀市に生まれた。佐賀中学校を卒業後、小学校・師範学校の教諭を務める。その後昭和24年、母校に赴任し書道部の指導に当たった。そして昭和44年から佐賀大学教育学部で教鞭を執る。また副島種臣、中林梧竹の研究でも「佐賀と梧竹」（書学 昭和41年1月号）、「副島蒼海・中林梧竹の書について」（佐賀県立博物館報 昭和48年）など多くの論文を発表している。土肥は書道教育の指導を通して、明日の佐賀県書道界を支える後進の育成に力を注いだ。現在佐賀県の書作家の中には門下生として教えを仰いだ当時の学生も数多い。

2. 土肥家に眠る“春嶽作品”

土肥春嶽の当時を知る人は皆、書に対する真摯な姿勢、そして膨大ともいえる揮毫の量について語らずにはいられない。昨年（平成8年）の9月に、佐賀市本庄町の自宅を訪問し、掛軸、まくり、

色紙等計170点の資料を拝見することができた。その中には20歳代の作品も含まれており、土肥春嶽の足跡を知るうえで貴重な資料である。その中から三点をとりあげ紹介したい。

①「体道他郷へ」三行書

土肥春嶽は書歴の初期において井上桂園、手島石卿、殿村藍田といった書家に師事している。その時期については不明の点が多いが、自分の書風を確立する努力の足跡として、また当時の時代背景などを知る資料として興味深い。

「乙亥歲旦」、昭和10年の作品である。

②「臥して聴く蕭々たる雨の窓を打つを」一行書

「二八」と呼ばれる二尺×八尺（本紙寸法225cm×52cm）の大作。

書作において“布置章法”という言葉があるが、簡単に説明すると、文字の配置により作品全体の構成に変化を与えることを指す。章法は書の美しさを決定づける最も重要な要素のひとつであるが、この一行書は土肥春嶽の章法の妙技が存分に発揮された一作である。「心、技、体、ともに最も充実した頃の代表作のひとつ」（佐賀県書作家協会山口流芳氏）である。

③色紙

土肥春嶽は数多くの色紙に揮毫しているが、およそ200点の色紙が自宅に保管されていた。書家協会会長米倉信義氏の談によれば、同窓会などで400枚以上揮毫したこともあるという。

題材は漢詩が主だが、創作の詩が裏面に書かれている。④は③の裏面だが、作者の人に対する優しいまなざしと、書作への愛情が込められているようで面白い。また今回は紹介できないが、調和体で書かれた書額も少数だが存在する。観覧者にとってはしばしば堅苦しく見える書の展覧会も、こういう作品があることで親しみやすくなるのではないだろうか。

土肥春嶽作品は土肥家資料の他、九年庵、はがくれ荘、佐賀銀行など県内に多数寄贈されており、多くの方に親しまれている。また個人で所蔵されている方の中には、わざわざ作品を持ち込んでくださった方もいて、回顧展開催の反響の大きさに

休道他郷多苦辛 同胞有友自
相親 柴扉曉出霜如雪 君汲川
流我持薪

乙亥歲旦 春嶽片

①

臥聽蕭蕭雨打窗

土肥春嶽

②

點茶風通 郷音隔夜露

海客

土肥春嶽

③

一つの言葉
一つの言葉
一つの言葉
一つの言葉
一つの言葉
一つの言葉

留心と待つをいふ

土肥春嶽

④

望外の喜びであった。

明治期の佐賀県が輩出した中林梧竹、副島種臣は近年ますます評価が高まっている。中国の古典に精通し、さらに独自の書風を確立した二人の書は、現代に生きる私たちにも新鮮な感動を与え続けている。土肥春嶽は梧竹、種臣を殊の外敬愛していた（あるいは“意識していた”といってもよい）が、それはやはり二人の書に対する姿勢に共感するとともに、書家としての理想の姿をそこに見出し出しているからであろう。書道教育を通して、土肥は書芸術の精神的部分と作品の持つ美について広く紹介した。そして自らの書作をもって、書を書くことの楽しさを私たちに伝えている。

今回の土肥春嶽回顧展では、主催者である佐賀県書作家協会、佐賀県書道教育連盟、佐賀新聞社と協力して、普段書にはあまり馴染みのない方に

も親しみを持てるような展示を心掛けた。作品の美しさを堪能していただくと同時に、当時の写真や愛用品なども併せて展示し、土肥春嶽の人物像がより鮮明に浮かび上がるように工夫をしてみた。

本展についての感想は様々であろうが、芸術に触れることはその作者の心に触れることでもある。そしてそれが展覧会の魅力であり、多くの方が美術館に足を運ぶ動機になっていると思う。今回担当した「土肥春嶽回顧展」の準備過程の中で、そうした芸術視賞の醍醐味を改めて認識できたように思える。

資料調査に関して、佐賀県書作家協会会長の米倉信義氏をはじめ、多くの書家の方からご助言、ご協力をいただいた。この場を借りて感謝を申し上げます。

（学芸課主事 野中研介）

エッセイ

日本人洋画家が見たラファエル・コラン

フランス人画家ラファエル・コラン (Louis-Joseph-Raphaël-Collin 1850-1916) は日本において、とくに日本近代洋画に関心をもつ人たちに知られた名前である。かれの作品はわが国の美術館にも所蔵されている。鹿児島市立美術館、福岡市美術館、久米美術館といった明治の洋画を常設展示のひとつとして置いているところがそうであり、また、久米桂一郎、岡田三郎助の作品を収蔵する佐賀県立美術館も平成6年度に『日だまり』（図版）を購入した。

コランは、日本近代洋画史のなかで「日本のアカデミズム」の基礎を築いた黒田清輝、久米桂一郎、岡田三郎助らのフランスにおける絵画指導者であったということで、日本の近代洋画史に名をとどめた。本稿は、日本近代の洋画家たちが見たコラン像を、かれらが語った思い出から抽出したものである。

コランについて日本人の洋画家たちが語りたいくつかの資料がある。以下掲載された雑誌毎に列挙する。

- (1) 『美術新報』第16巻第2号 1916年12月
 - ・黒田清輝「コラン先生の追憶談」
 - ・久米桂一郎「コラン先生の製作と其平生」
 - ・岡田三郎助「夏期のコラン先生」
 - (2) 『中央美術』第2巻第12号 1916年12月
 - ・黒田清輝「逝けるコラン先生」
 - ・岡田三郎助「ホンテェー一村のコラン先生」
 - ・和田英作「コラン先生の追憶」
 - ・山下新太郎「日本人好きのコラン先生」
 - (3) 『中央美術』第3巻第1号 1917年1月
 - ・中村不折「コランとローランス」
 - (4) 『美術』第1巻第2号 1916年12月
 - ・黒田清輝「コラン先生追憶」
 - ・久米桂一郎「コラン先生追憶」
 - ・岡田三郎助「コラン先生追憶」
 - (5) 『美術』第1巻第4号 1917年2月
 - ・黒田清輝「コラン先生逸事」
- この他に、新聞に掲載された記事が散見される。



ラファエル・コラン『日だまり』1896年

ここでは、いわばコラン追悼特集と言える上記雑誌を中心に、日本人洋画家一人ひとりのコラン観をみていきたい。ただしコラン像といっても、具体的には日本近代洋画家たちの眼をとおしてコランの絵画論を探ろうとするものである。そのことがひいては、日本の洋画家たちにあたえたコランの影響の実際の姿を知ることになると思われる。

黒田清輝

コランは印象派、クラシックの一方に偏することなく、「仏蘭西の美術に最特種な特長のある優美といふことを離れず、外光派を完成」させた。それは、「色から云ふと柔かい、穏やかな、そして明るい、そして柔かい中にも強みのある色を用ゐられて、形の方はクラシックに偏せずして、優美な、線の簡単な、正しい形」を描くことによって、印象派の濃き色彩と崩れやすい形を避け、なおもクラシックの陰鬱な色彩と厳格な形から遠ざかうとした。

作品の主題については、「実際の物、即ち朝晩に常に見るところの物を画題とすることは卑しいことゝしてやられなかった。始終詩的冥想の中に居られて、自然中の自然の美を喜ばれた、多く画題にせられたのは詩とか歌とか、又春とか夏とか云ふ様なものを、裸体の女を借りて之を主題として、それに適はしい風景を添えて画」くという「理想的」な絵画をコランは意図した。

作品を制作するにあたっては、形と色の材料を

スケッチし、大作の準備とした。「デッサンはデッサンで人間の体から取られて、そして色は色で別にいろいろスケッチ様のものを描いて置いた。「色の材料は夏の内に別荘の庭でモデルを使はれて、材料を拵へて置いて、冬の画室で製作」した。制作段階の色彩表現において、「昼見た色の感じが夜も変わらないやうにと苦心」し、根気よくこの色彩の昼夜変らない安定感をもとめた。

久米桂一郎

コランがもつとも得意としたのは「若い婦人を画題とした人物画」であり、「フロレアル」—1885年にフランスに渡った藤雅三は、リュクサンブール美術館でこの作品をみて、コランに入門することになる（筆者註）—の画が出来た以前からして、画室の光線から離れて、外気中の極柔かな色の調和に着目する様になった。こうした変化は、パスチャン・ルバージュ (Jules Bastien-Lepage 1848-84) から受けた感化であったと思われる。しかしその影響は「主にも技巧の上のみ」であり、コランが目的としたものは、ルバージュがえがく農民の現実的な田園生活の「実況」ではなく、「現実の生活から離れた一種の理想画であって、最純粋な古典趣味を似て写生に基いた画き方をされたわけで、そこにコラン先生には他の画家とは違った高尚なところも、又優美なところもあると思われる。」

こうした「理想的の画題」にも、「天然の風景を人物の背景として最も実際に近い趣を為すことに苦心」した。コランの画は「写生を根拠としたものであるけれども、又余り現実な感じを避けて、何処までも、形でも色でも高尚にすることを研ぎ上げたもの」である。すなわち「裸体の肉色と極めて柔かな感じがある草や木の葉の緑色とが渾然たる調和をなして居る」に深い趣をみいだす。

しかしコランの美術家としての位置はあくまでもクラシック派の代表であり、「旧式の遣り方を改めて段々新しい真眼に向って居られた」けれど、一方でコランの画の性質は「形のデッサンの純正なことを主眼とした技術」にあり、「仏蘭西の極

正統なる伝習を保存していく側」であった。

岡田三郎助

コランは自分の画をえがくところの庭は自然のまゝに打捨てゝあつた。その中央に山桐の老木があつた。「手本（モデル—筆者註）は多く山桐の樹下に置かれ、自分は西北の方から描いて居られるのが常であつた。午後光を好まれた」ということもあつたであろう。コランが女性のモデルを描いているところはけつして見ることはできなかったが、一度その様子を垣間見ることができた。「例の桐の木の下で、ライルを持った女が腰に美しい、調子の弱い布を巻いて、家内から運ばれたスプリング付の寝台の上で横に飛んだ形をして居た。それは薄ドンヨリした緑の調和とおだやかな光とに包まれて、何とも言へぬ落ちついた光景であつた。」

和田英作

コランは、日本の美術では、たとえば酒井抱一よりも尾形光琳を尊重するという。光琳は「装飾的な処と云ひ、色の階調と云ひ、コンポジションの大きな処と云ひ、とても比較にならない」という。また、彼の装飾画をえがくに際しては、「少女の顔、全体の姿勢には春信の画の気持ちに得るところが多い。春信の画の優美なるは実に驚くべき程だ。」とも語っている。

西欧の画家については、コランはレンブラントをもつとも「崇拜」した。「フランツ・ハルスも偉い画家であつたが、レンブラントはフェーマニチーの大画家」であり、「近代ではコロロとビューヴィス・ド・シャヴァンヌ、ミレーなどを崇拜し、英国ではゲーンズボロー、ターナー、コンステブルなどが皆なグランメートル」と評価していた。その理由は、かれらが皆「各々自己のヴィジョン」を持っていたがためであり、「手がよくても、眼がよくても、ヴィジョンがよくなくてはグランメートルとは云われぬ」からだつた。そして最後に、コランはもつとも賞賛すべき画家としてドガの名を挙げた。

（企画普及係長 松本誠一）

行事案内

1月⇨3月

日	月	火	水	木	金	土
			①	②	③	④
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	③	4	5	6	7	8
9	10	①	②	12	13	14
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	③	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

カレンダー内、□印は休館日

常 設 展			展 覧 会			
観覧料大人200(150) 大学150(100)※高校生以下は無料、()内20名以上団体			枠内に明記する以外は無料			
博 物 館		美 術 館				
1号展・2号展・3号展・大展		1号入展		2号展 3号展 4号展		
12月28日(土)～1月1日(水)まで年末・年始のため全館休館します。						
常設展 佐賀県の歴史と文化 (1月2日～1月4日は、正月特別開館)	1/2～	1/2	1/2	土肥春嶽回顧展 1/2(木)～1/19(日) (有料) 佐賀新聞社		
		旅の楽しみ	彫 刻	佐賀の信仰と美術展 1/25(木)～3/2(日) (有料) 佐賀県立美術館		
		2/2		〔記念講演会〕 講師：東京芸術大学名誉教授 西村公朝先生 演題：仏像の美 日時：2月22日(土) 14時より 場所：美術館ホール		
		2/4	百武・久米 岡田 三人展	展示準備のため休館 第41回 佐賀大学教育学部美術・工芸科卒業制作展 3/8(土)～3/14(金) 佐賀大学教育学部		
		3/2	3/4～	愛とロマンの旅人 竹久夢二展 3/19(水)～4/13(日) (有料) 佐賀新聞社		
		佐賀県出土 の 武器形祭器				

日 誌



国際陶芸アカデミー (IAC) 会員展
会場・会期 佐賀県立美術館 9/27～10/13
観覧者数 5,829人



第5回 佐賀県立美術館所蔵 冬の美術館
会場・会期 鳥栖市立図書館 12/6～12/15
観覧者数 1,704人

佐賀県立博物館・美術館報 第116号

平成9年1月20日

編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

〒840 佐賀市城内1-15-23 TEL.0952・24・3947 FAX.0952・25・7006

印刷 日之出印刷株式会社